

アウグスティヌスと

プラトンにおける「分有」

中 川 純 男

1. アイデアと個物との関係としての分有の思想はプラトンにその起源を求めることができる。アウグスティヌスもこの意味での分有の思想を受け継ぐ。プラトンのアイデアについてとくに論ぜられている『八十三の問題集』第46問において、次のように言われている。

「アイデアの分有によって、いかなるものであれ、どのようなものであれ、存在するようになる。」 *quarum (sc. idearum) participatione fit ut sit quidquid est, quoquomodo est.*

しかし同時にこの箇所では、プラトンには見られなかった思想もアイデアについて述べられている。すなわち、アイデアは神の精神の内にある、と言われている。以下においてわれわれは、アイデアを神の精神の内に措定することが、アウグスティヌスにおける分有の概念に、プラトンの場合と比べ、いかなる相違をもたらしたかを考えることにしたい。この問題を考えるため、われわれはまずプラトンにおける分有とはいかなるものであるかを見ることにしよう。

2. プラトンにおける分有の基本的な表現は、『パイドン』の次のことばに見ることができる。

「美そのもの以外に何か美しいものがあるなら、それは他ならぬ美そのものを分有していることによって美しい。」 *εἴ τί ἐστιν ἄλλο καλὸν πλὴν αὐτὸ τὸ καλόν, οὐδὲ δι' ἐν ἄλλο καλὸν εἶναι ἢ διότι μετέχει⁽¹⁾ ἐκείνου τοῦ καλοῦ.*

美しいものに二つが区別される。一つは美そのもの、すなわち美のアイデアであり、もう一つはアイデア以外の美しいものである。美のアイデアとそれ以外の美しいものは、それぞれ単独に美しいのではない。アイデア以外の美しいものは美のアイデアを分有することによって美しい。分有という語によって表わされているアイデアとそれ

以外の美しいものとの関係は、アイデア以外の美しいものは、アイデアによって *διὰ* 美しいという関係である。この意味において、美のアイデアはもろもろの美しいものの原因である、とすることができる。

では美のアイデアとそれ以外の美しいものとは、いかなる点において区別されるのであろうか。プラトンによれば、美のアイデアは「それ自体としてそれ自体とともに同態にして常にある。」 *αὐτὸ καθ' αὐτὸ μεθ' αὐτοῦ μονοειδὲς αἰεὶ ὄν.* ⁽²⁾ 美のアイデアは他のものに依存することなく、不変に美しいものとしてある。それに対し、美のアイデア以外の美しいものは、美そのものを分有し、生じたり滅びたりしながら、そのように限られた仕方 ⁽³⁾ で *τρόπον τινά* 美しい。美のアイデアとそれ以外の美しいものとは、前者が不変であるのに対し後者は可變的であるという点において区別されているのである。

では可變的な美しいものはなぜ美のアイデアを分有しているといわれるのであろうか。美のアイデア以外の美しいものとは感覺的世界に見い出される美しいものである。しかし感覺的世界に、本当に美しいものが見い出されるのであろうか。感覺的世界に見い出される美しいものは一つではない。多くの美しいものがそこに見い出され、あるものは他のものより美しい。そしてさらに、そのいずれよりも美しいものが見い出されるのであろう。感覺的世界の内に、これこそ決して美しさを失わない本当に美しいものである、と言えるようなものは何一つ見い出されない。しかしそれにもかかわらず、この世界に多くの美しいものが見い出されることも事実である。そしてそれらの美しいものは可變的であるにもかかわらず、「限られた仕方」で美しい。個々の美しいものは美そのものたる美のアイデアと限られた仕方 ⁽³⁾ で共通性を持っている。それゆえ、個々の美しいものは美のアイデアを分け持っている、分有していると言われるのである。

3. 個々の美しいものと美のアイデアとの間に成り立つこのような分有の関係は、プラトンにおいて、他のあらゆる感覺的個物とアイデアとの関係に適用することができる。感覺的個物の内には、そのいずれをとってみても、いかなる点をとってみても、まさにそのものであるようなものは何もない。感覺的世界においては、美しいものよりさらに美しいものが見い出され、ある人間からは求められなかった人間ら

しさを他の人間に見い出すことができるであろう。完全に美しくあるもの、完全に人間らしくあるもの、それはもはや感覚的世界に見い出される美しいものや人間ではありえない。まさに美しいもの、まさに人間らしくあるもの、それこそプラトンにとって、人が学ばねばならないイデアなのである。

一般に、イデアは「完全に存在するもの」 τὸ παντελῶς ὄν であり、感覚的個物は「在りかつ在らぬもの」 ὄν τε καὶ μὴ ὄν であると特長づけられる。⁽⁴⁾ここで注意しておかなければならない。「在りかつ在らぬもの」とは「ある時には存在するが、別のある時には存在しないもの」という意味ではない。もしそうであるなら、個物も存在するかぎりにおいてイデアと同じであることになろう。⁽⁵⁾美しい個物はいかに美しくあろうとも、個物であるかぎり、より美しいものの現われる可能性を否定するわけにはゆかない。⁽⁶⁾ある個物が美しいのはただそれが今美しく現われているからなのである。個物にとって存在するとは、実は現われていることに他ならない。個物のこのような在り方が「在りかつ在らぬ」と言われているのである。

しかし個物の存在がこのように不完全であるのは、それが現われるにすぎないからである、とただちに結論することはできない。完全な現われもまた考えられるからである。個物にとって存在するとは現われることであるが個物の存在の不完全性を表わしているとしても、現われであるから個物の存在は不完全であるとは結論されないのである。

では個物の存在の不完全性は何に由来しているのであろうか。それは個物がそこにおいて現われる場 χώρα に由来するのである。このコーラーにイデアが映し出され、そこに個物が現われる。現われるという仕方では存在する。しかし無秩序に震動するコーラーはイデアが完全に映ることを許さない。⁽⁷⁾個物がイデアの不完全な現われであるのは、このコーラーによるのである。イデアならざるこのコーラーは、イデアが完全に映し出されるのを許さないという仕方では、個物の生成の、いわば根源となっていると言えよう。

以上をまとめれば次のようになる。プラトンにおいて、イデアは感覚的世界の外にある、個物の存在の原因である。イデアは不変であるが個物は可変的であるという点において両者は区別される。この両者を区別しているものは、イデアならざる生成の根源コーラーである。イデアは個物がそれによって δικά 存在する原因である

が、個物はアイデアの不完全な現われであるから、個物はアイデアを分有していると言われる。

4. プラトンにおける分有についてわれわれの知りえたことを念頭におきつつ、次にアウグスティヌスにおける分有の思想を見てみよう。

『八十三の問題集』の最初に引用した箇所において述べられていたように、アウグスティヌスも分有をアイデアと個物との関係において受け入れている。ただアウグスティヌスはアイデアを神の精神の内に措定した。この点においてプラトンと異なっている。それゆえ、われわれはまずアウグスティヌスにおける分有の思想のプラトンとの共通点を明らかにしたうえで、アイデアを神の精神の内に措定することから由来する両者の相違点について考えることにしよう。

アウグスティヌスにとって神とはすべてのものの造り主である。しかし神自身はそのすべてのものに含まれていない。したがって神の精神の内にあるアイデアも神が造った世界の内には含まれていない。それゆえ、アイデアが神の精神の内にあるか否かはプラトンにおいて述べられていないが、アイデアがこの世界に含まれていないとする点においてアウグスティヌスは、感覚的世界の外にアイデアを措定したプラトンと共通している。

さらに、神の精神の内にあるアイデアは神の存在の仕方において存在する。すなわち、「神の精神の内には永遠で不変なものしかありえない。」⁽⁸⁾ *neque in divina mente quidquam nisi aeternum atque incommutabile potest esse.* したがって、アイデアは「永遠であり、同態にして不変なものとして留まっている。」⁽⁹⁾ *aeternae (sc. ideae) sunt, et eiusmodi atque incommutabiles manent.* そしてまた「アイデアは生ずることも滅びることもないが、それらによって、生じ滅びうるものすべて、生じ滅びているものすべては形成されると言われる。」⁽¹⁰⁾ *cum ipsae (sc. ideae) neque oriuntur, neque intereant; secundum eas tamen formari dicitur omne quod oriri et interire potest, et omne quod oritur et interit.*

この世界に見い出されるものはすべて生じまた滅びうるもの、生じつつありまた滅びつつあるものである。この意味において、この世界に見い出されるものはすべて可変的である。しかし神の精神の内にあるアイデアは不変である。そしてこの不変

のアイデアによって *secundum, per*, この世界に見い出されるすべてのものは形成されている。アイデアは個物がそれによって形成される、個物の原因である。この点においても、アウグスティヌスはプラトンと共通している。

5. しかし以上の考察からただちに、アウグスティヌスにおける分有の概念とプラトンにおける分有の概念とは完全に同じである、と結論することができるであろうか。確かに、アイデアと個物の関係についての両者の考え方には重要な共通点があることをわれわれはすでに見た。すなわち、両者とも（一）アイデアをこの世界の外に措定している。（二）アイデアは不変であるが、この世界に見い出される個物は可変的である。（三）個物はアイデアを原因とし、アイデアによって *δία, per* 存在している。

しかしアウグスティヌスにおいてアイデアは神の精神の内に措定されている。アイデアがこの世界の外にあるのは神がこの世界の外にあるからであり、アイデアが不変であるのは神が不変だからである。アウグスティヌスがプラトンのアイデア論を受け入れることができたのは、プラトンのアイデアがアウグスティヌスの神と、これらの共通性を有していたからであるとも言えるであろう。ではアウグスティヌスの神はプラトンのアイデアと完全に同じなのであろうか。そうではないと思われる。

プラトンにおいて、アイデアと個物との相違を説明するために、アイデアでも個物でもない第三のものが必要であった。個物をアイデアから区別しているコーラーが、個物の生成のいわば根源として措定されなければならなかったのである。

アウグスティヌスも個物とアイデアとを区別している。では、この個物とアイデアとの区別を根拠づけているものは、アウグスティヌスにおいていったい何であらうか。神はこの世界を造った。しかし神は何らかのものからこの世界を造ったのではない。すべてのものは神が造ったのであって、神に造られないようなものは何もないからである。神は無から世界を造ったと言われる。しかしアウグスティヌスにおける無は、プラトンにおけるコーラーと同じではない。コーラーはアイデアの現われが完全であることを許さないものとして、何らかの仕方存在する。ところが無とは文字通り何も無いことである。したがって、アウグスティヌスの場合、神が無から世界を造ったということは、アイデアが現われるにあたってその現われが完全であることを妨げるものは何もないということである。神が無からこの世界を造ったと

いうことは、神の精神の内にあるアイデアはこの世界に完全に実現するという意味するのである。

6. アイデアはこの世界に完全に実現する。このことからわれわれは二通りの論理的帰結を予想することができる。一つは、たとえば人間のアイデアをとってみるなら、人間のアイデアがこの世界に完全に実現しているということは、プラトンにおけるようにアイデアの一つであることを前提とするならば、この世界にも人間のアイデアと完全に同じものが内在しているということになる。この場合、世界に内在する人間のアイデアとはアリストテレス的にいえば、人間の形相・種であることになる。もう一つの論理的帰結は、この世界における人間の多様性がすべてアイデアに根拠を有していることを前提とし、人間の多様性に応じて人間のアイデアにも多を認めることである。この場合、個物はアイデアと厳密に対応していることになる。アウグスティヌスがとるのは後者である。⁽¹¹⁾なぜアウグスティヌスは後者を選ぶのか。それは神が世界を造ったということが、無から造ったという意味の他にもう一つの意味を、アウグスティヌスにとって含んでいるからである。すなわち、神が世界を造ったとは、ただ過去形において語られるだけではない。神はすべてのものを完全に支配している。そしてこの支配が合理的である以上、神の内にはすべてのものの理念 *ratio* としてアイデアがなければならないのである。アウグスティヌスがプラトンのアイデア論を受け入れた大きな理由も実はこの、すべてのものに対する神の合理的支配ということだったのである。⁽¹²⁾

神はこの世界にあるすべてのものを造り、造られた個物のそれぞれを支配している。したがって、神の精神の内にあるアイデアは個物において完全に実現する。

7. アウグスティヌスにおいて、アイデアと個物との間に完全・不完全という相違はない。個物は可変的ではあるが、アイデアを完全に実現するからである。この点をさらに詳しく考えてみよう。

『告白』第Ⅰ巻6章9節で、次のように言われている。

「あなたのもとには、静止することのないものすべての原因が静止し、可変的なものすべての不変の始源が留まり、非合理的時間的なものすべての永遠の理念が生

きています。」 apud te rerum omnium instabilium stant causae et rerum omnium mutabilium immutabiles manent origines et omnium irrationalium et temporalium sempiternae vivunt rationes.

これは神への呼びかけの一部である。なぜアウグスティヌスはこのように神に呼びかけているのであろうか。「私の幼児期」が死んですでに久しい。そのすでに死んでしまった幼児期に先立つ時期が何かあったのか。それをアウグスティヌスはここで神に問うている。なぜなら、「私」にとって幼児期はすでに死んでしまい、その記憶すら残っていないが、神の内に「私の幼児期」は生きており、したがって神はその幼児期に先立つ時期を知っているからである。しかし「私の幼児期」は「私」において生きていたのと同じ仕方で神の内に生きているのではない。それは理念 ratio として神の内に生きている。すなわち、「私の幼児期」はアイデアとして神の内に生きているのである。

では「私」において幼児期がすでに死んでしまったのはなぜか。人間にとって幼児期が死ぬことは少年期が生きることである。そしてその少年期も、青年期が生きるためにやがて死ぬ。このように次々と継起する時期を生き、そして死ぬことによって現在の「私」が生きている。「私の幼児期」がすでに死んでしまったのは、「私」が生きるためだったのである。

この世界に存在しているものはすべて可変的である。可変的なものにとって存在しているとは、次々と継起する時期を通して自己の全体を実現することなのである。これに対し、アイデアにおいては、可変的世界で継起的に実現する個物の全体が同時に実現している。否、むしろ、個物の方がアイデアにおいて実現している自己の全体を実現すべく存在していると言うべきである。⁽¹³⁾ 個物の生成、変化、消滅はすべて、アイデアにおいてすでに実現しているという仕方で、個物にとって予め定められているからである。⁽¹⁴⁾ この意味で、可変的個物はその可変的な在り方において、アイデアにより per 形成されていると言うことができる。プラトンにおいて個物の可変性は個物の不完全性を意味したが、アウグスティヌスにおいて、個物は可変的であるが不完全ではないのはこのためである。

アイデアは個物において完全に実現する、とわれわれは先に述べた。その意味は、より厳密に言うならば、個物はその可変的な在り方においてアイデアを完全に実現す

るということなのである。しかし個物のこのような可変性そのものは、アイデアによって神に完全に支配されているのであるから、プラトンの場合のように個物の不完全性を意味しないのである。

8. 以上、われわれはアウグスティヌスにおける分有の思想を、プラトンにおける分有の思想との比較において見てきた。アイデアを神の精神の内に措定することが、アウグスティヌスにおける分有の概念に、プラトンの場合と比較し、いかなる相違をもたらしたか。われわれの知りえたことを要約して結論としよう。

アイデアは、個物がそれによって *δία*, per 存在するという意味で個物の原因である。この点において、アウグスティヌスの分有の概念はプラトンのそれと共通する。

さらに、プラトンにおいて、分有の概念は個物のアイデアに対する不完全性を含意していた。しかしアウグスティヌスにおいて個物はアイデアの完全な実現である。アウグスティヌスがアイデアと個物との関係に分有という語を用いるとき、そこにはいかなる不完全性も含意されていない。この点において、両者の分有の概念は異なる。

アウグスティヌスとプラトンにおける、この分有の概念の相違は、アウグスティヌスがアイデアを神の精神の内に措定したことに由来している。なぜなら、プラトンにおいて個物の可変性はアイデアならざる根源に由来しているが、アウグスティヌスにおいて個物の可変性も神の支配の下にあるからである。

しかしながら、ここでわれわれは次のような疑問に出会うであろう。自らは不変である神はいかにして可變的な個物を支配しているのだろうか。神の内にあるアイデアが個物において完全に実現しているとしても、このことは個物の可變性そのものについて何ら根拠を与えることにはならないであろう。かえって、アイデアが個物において完全に実現しているとするのは、個物の可變性をアイデアと個物との関係によって説明することを不可能にする。アウグスティヌスにおいて、個物の可變性は何に根拠を有しているのだろうか。また、いかにして神に支配されているのだろうか。この問題を考える手がかりも、やはりアイデアが神の精神の内に措定されていることにあると思われる。これが次に探究されるべき、われわれの課題となる

であろう。

註

- (1) *Phaed.* 100 c 4-6
- (2) *Symp.* 211 b 1-2
- (3) *Symp.* 211 b 2-3
- (4) *Resp.* 477 a 3, 478 d 6
- (5) *Resp.* 478 d 5-6 ἀμα ὄν τε καὶ μὴ ὄν; 478 e 1-2 τὸ ἀμφοτέρων μετέχον, τοῦ εἶναι τε καὶ μὴ εἶναι
- (6) *Resp.* 479 a 6-7
- (7) *Tim.* 52 a *sqq.*
- (8) *Q.* 83, q. 46
- (9) *ibid.*
- (10) *ibid.*
- (11) たとえば、後に引用する *Conf.* I, 6, 9 では、「私」のイデアが考えられている。
- (12) *Q.* 83 q. 46
- (13) ある意味では、何らかのものが生じてから滅ぶまでに実現する存在がそのものの全体であると考えられる。しかし、そのものもさらに大きな全体への秩序において存在しているのであるから、先に個物と考えられたものもこの意味では部分として存在するにすぎないと考えられる。継起的に存在するものは、いかなる観点から見られるかにより、全体として理解されるものも変わってくるのである。これに対応し、何を個物として理解するかも変わってくる。したがって、アウグスティヌスは言う。 *Epist.* 14.4 mihi videtur, quod ad hominem faciendum attinet, hominis quidem tantum non meam vel tuam ibi (*sc.* in summa veritate) esse rationem; quod autem ad orbem temporis, varias hominum rationes in illa sinceritate vivere.
- (14) *Conf.* XI, 8, 10 omne, quod esse incipit et esse desinit, tunc esse incipit et tunc desinit, quando debuisse incipere vel desinere in aeterna ratione cognoscitur